

れている。そのほか、真珠、車エビ、ワカメ、ハマチ、カニなど、かん水蓄養殖業も年々盛んになってきており、車エビのように、東京市場の七割、全国市場の六割以上を占める有利な特産品もある。このため、沿岸漁業の構造改善を強力

水資源の確保の切札

天草島は地形が複雑、急峻で、林地の保水力にとほしく、河川の流域も小さいため、従来から水不足になやんできた。しかし、農業の近代化がすすみ、生活水準の向上、観光の開発など、地域開発がすすむとともに、農業用水や生活用水の需要は急速に高まり、特に農業用水の確保は、樹園地の造成とともに、天草島の開発にとって、欠くことのできない急務となってきた。

このため、天草地域では、恒久的な水資源の確保をはかるための対策が、強力に推進されており、河川にダムを築造するものとして、楠浦地区土地改良事業と志岐地区土地改良事業、海面を堤防によって締め切り、淡水化するものとして、羊角湾地区開拓パイロット事業が推進されている。

楠浦地区開拓パイロット事業 本渡市楠浦町の方原川上流にダムを築造して、約一〇〇万立方メートルの水を貯水し、水田一七三畝の用水補給と、果樹園一三四畝の畑地灌漑を行なう事業である。三十八年に

に推進し、生産の増大をはかるとともに冷蔵トラック、製氷冷蔵施設、水揚荷さばき所など、流通関連施設を重点的に配置し、県内主要市場のほか、東京、京阪神、北九州など、大消費市場への出荷態勢を整備することとしている。

着工して、現在、主要工事である土堰堤の八割ができあがっており、十二月には完成する。四十二年には、受益地に水を通す幹線水路が施工される予定であり、事業費は約五億円である。

志岐地区開拓パイロット事業 天草郡志岐町の志岐川上流にダムを築造して、六七万立方メートルの用水を確保し、水田一四〇畝の用水補給と、果樹園および菜畑一七〇畝の畑地灌漑を行なう事業である。現在、調査中であり、本年度に計画をまとめ、四十二年には実施設計を完了して、四十三年度から着工の予定である。事業費は、約四億三、〇〇〇万円と見込まれている。

羊角湾地区開拓パイロット事業 天草下島西岸の羊角湾の一部、四三八畝を、長さ四四〇メートルの堤防で締め切り、淡水湖を造成し、一方、湾周辺の山林を開墾して、一、〇五七畝の果樹園を造成するとともに、既成園二二八畝も含めて、淡水湖の水による畑地灌漑を行ない、さらに、湾内の一部を干拓して、一九〇畝の

天草島の観光は、陸上交通機関である自動車、海の上を疾走するという魅力が、まず人々をとらえるのである。天草島の観光は、その豊富な特色のある観光資源の割には、あまり華やかなものではなかった。阿蘇と雲仙を結ぶ横断国際観光ルート上に位置しているにもかかわらず、離島という交通上の不便のた

ふくれあがる島の観光客

しかし、天草五橋が海の上に姿をあらわしはじめた昨年から、次第に観光客が増加し、四十年は約五十四万人、五橋が開通する本年は、一躍八〇万人にふくれあがり、四年後の昭和四十五年には、年間一五〇万人の観光客が、天草島を訪れるものと想定されている。年間最大月の八月には、約二〇万人の観光客が、天草島に押し寄せると思われるが、これは、現在の島内人口とほぼ同数である。

これらの観光客を受け入れるために、道路の整備はもちろんであるが、県では現在、市町村と協力して園地、展望台、休憩所、宿泊施設、駐車場、登山道路など、各種のサービス施設の整備につとめている。民間資本による観光投資も盛んであり、ホテル、遊園地、ゴルフ場、亜熱帯植物園や自然水族館、海水浴場など、次々と目新しい計画が実行に移されており、遊覧船や釣船など、海上の観光施設も装いを新たにしている。

め、日程の中からオミットされ、観光客は、有明の海から雲仙から、遠く天草島のただいまを望み見るだけであった。天草島を訪れる観光客も、三十五年から四年間に、一六万人増加し、三十九年の実績が年間四七万六、〇〇〇人、阿蘇地域の六分の一に過ぎなかった。

天草観光のこれからの問題点は、むしろ天草島の美しい自然を、どのように保ち存していくかという、自然保護の問題にある。それと、島内の幹線道路を早急に整備して、天草五橋から本渡市へ、さらに下島の海岸を、北から南へ下るマリア海岸コースを経て、牛深市から、南九州に至る周遊ルートを確立し、九州横断国際観光ルートや南九州観光ルートなど、最近脚光をあびている広域観光ルートとの結びつきを深める必要がある。

次に、天草地域の商業およびサービス業は、今後、観光との結びつきを深めることよって、一層の発展が期待される。商業については、架橋による輸送コストの引き下げと、輸送時間の短縮により、島外商業資本の進出が容易になり、また、架橋を利用して、地元で購入力が島外に流出する心配もあるが、一面、観光客の増大により、島外の購買力が島内

水田を造成するという多目的の開発計画である。この事業は、国営で施工されることになっており、本年度に計画をまとめ、四十二年および四十三年の二カ年で実施設計を完了し、すみやかに着工する予定である。事業費は、約四六億円と見込まれている。

以上は、現在実施中、もしくは計画中の主な水資源開発事業であるが、そのほか、地域全般にわたって、河川水、地下水の積極的な利用開発を行ない、農業の経営規模の拡大、生産の選択的拡大の推進につとめる。また、生活用水については、簡易水道の普及を促進しており、現在、四二・三％の普及率に達している。

観光・商業の振興

天草の真珠

真珠養殖に適した天草の海……とりわけ天草東南沿岸は養殖真珠の宝庫といったところか。先進地が、このところ密殖に陥り、品質が落ちてきたのにくらべ、企業的にとりあげられたのが、これも本格化したのは三十二年頃からのこと、いわば成長期の天草パールは、計画に従った生産で品質がよく、諸外国にも高く評価されている。現在の企業体は二六、生産高も三十九年度は約三・六トン、約一億円と、三十五年度にくらべ二倍近い伸びを示し、その九〇％は外国に輸出され、外貨獲得に貴重な役割を果たしている。ところで、この養殖真珠も、商品になるまでには、大変な日数と人手がかかる。まず、約三年を必要とする母貝、いわゆる真珠貝

道路公団福岡支社の推定によると、天草五橋の開通によって、天草島の自動車交通量は飛躍的に増大し、最大日交通量は八、〇〇〇台、そのときの最大時間交通量は九六〇台に達し、一日四、〇〇〇台以上の交通ラッシュの日が、少くとも、年に一〇回程度は起るものと想定されている。

年間平均一日交通量については、一日平均七〇〇台という想定もあるが、九州横断道路やまなみハイウェイの開通のときの例からみても一日平均二、〇〇〇台は、あながちオーバーな見方ではない。開通初年度の年間日平均交通量を二、〇〇〇台とした場合そのうち七〇〇台は産業交通であり、残りの一、三〇〇台は、観光交通であると言われている。

よこがお

真珠養殖に適した天草の海……とりわけ天草東南沿岸は養殖真珠の宝庫といったところか。先進地が、このところ密殖に陥り、品質が落ちてきたのにくらべ、企業的にとりあげられたのが、これも本格化したのは三十二年頃からのこと、いわば成長期の天草パールは、計画に従った生産で品質がよく、諸外国にも高く評価されている。現在の企業体は二六、生産高も三十九年度は約三・六トン、約一億円と、三十五年度にくらべ二倍近い伸びを示し、その九〇％は外国に輸出され、外貨獲得に貴重な役割を果たしている。ところで、この養殖真珠も、商品になるまでには、大変な日数と人手がかかる。まず、約三年を必要とする母貝、いわゆる真珠貝

に流入し、また島内産業の発展により、住民所得も次第に増加するので、架橋による地元購買力の流出以上の売上増が期待される。すでに本渡市、牛深市、松島町などの商業、観光の中心地では、商店街の美化がすすめられており、従来みられなかった百貨店方式の共同店舗も姿をみせている。特に、三十九年十月に焼失した本渡市の中心商店街は、架橋開通を契機に、見事に復興し、天草島の中心都市にふさわしい装いをこらしているのである。さらに、本渡市が過去数年にわたって造成し、現在も続けている海岸の広大な埋立地は、天草島の都市的な発展に、今後大きな力を発揮するであろう。

鉱・工業の育成

天草地域には、良質の無煙炭や、わが国の陶磁器産業に欠くことのできない天草陶石、さらに、化学工業の原料となる石灰石や、建築材料にもなる砥石など、多くのすぐれた地下資源がある。その生産額も、県内鉱業総生産額の三分の一を占め、県内有数の鉱業地帯である。

天草無煙炭

下島の西岸一帯から牛深にかけて、大量に埋蔵されており、理論可採量は、七、四〇〇万トと推定されている。炭質が良好でカロリーも高く、極めて優秀な原料炭として、需要も旺盛である。現在、年間四〇万ト、二、四〇〇万円程度の生産

をあげているが、鉱脈が二乃至四尺の高さしかなく、褶曲や断層のため鉱脈が分断され、また海底からの湧水も多く、機械化が困難である。そのため、従来は採炭率の低さを炭質によってカバーしてきたが、最近の労働力不足と、石灰産業の不況によって、深刻な打撃を受け、また経営規模も零細であったので、閉山するところも出ていた。したがって、三十七年二月に産炭地域振興の区域指定を受け、開発資金の導入による設備の改善、労働力の確保をはかっているが、その前途は、かならずしも楽観を許さない状態である。

天草陶石

天草町を中心として下島西岸一帯に賦存しているが、埋蔵量は二、三〇〇万トと推定されている。現在、年間六万五、〇〇〇ト、約二億円の生産額を上げており陶磁器の原料として、品質の上でも生産量の点でも、日本一の陶石である。

天草陶石は、全国の陶石産額の半分以上を占める重要な特産品であり、現在五つの企業体によって採石されている。出石量は毎年順調な伸びを示しているが、採掘箇所が次第に深部に移行し、坑道が延びて、採掘条件は悪化しつつある。また、一部の優良鉱を除いて、ほとんどが手掘りであるため、採掘率が低く、労務費が高くつく欠点がある。このため、採掘技術の改善、多量に産出する廃石や下級品の利用をはかるため、現地で企